

## 留学報告書 ～異文化交流を通して学んだこと～

ボーリンググリーン州立大学  
国際文化学部生（長期）

留学はさまざまな国から来た学生が在学しているため、海外の文化や習慣を知ることができる。加えて、多様な価値観に触れる機会も多く、異文化、相手への理解が深まると考える。アメリカ、オハイオ州にあるボーリンググリーン州立大学に留学したことによる発見や学び、日本との比較について自分の体験を通して振り返る。

留学をしようと思った理由は、海外への興味である。中学生の2年間父親の駐在がきっかけでタイに住んでいた。この海外に住んでいた経験から、漠然と海外に行きたいという気持ちがあった。また、英語力や国際経験は将来のために役立つと考えていたことも理由の1つだ。名古屋学院大学で多くの国際関係の授業を履修したことによりこのような思いはますます強くなり、今回の留学に至った。

この留学生活を通して、日米間の違いとして「授業の質」が挙げられる。授業の内容や形態は教授によってさまざまであるが、アメリカの大学の授業は、日本とは全く異なるスタイルである。1つ目に挙げられるのは、授業時間の制度だ。名古屋学院大学では、それぞれの授業が1週間に1回の受講で、講義時間は1時間半と決まっている。対して、私が留学した大学では50分または75分の授業を1週間に2、3回に分割して行う。

2つ目は、授業が小分けされているため、週の終わりに「recitation class」と呼ばれる1週間の授業内容の復習をディスカッション形式で行うものがある。生徒主体で授業が進んでいく点が特徴的であった。日本の大学は、教授から学生へと矢印が一方的に向いている場合がほとんどである。講義を聞き、ノートをとるというスタイルに対して、アメリカは学生が主体的に発言をし、学生同士、また教授と学生の間で矢印が向き合っているという構図が印象的であった。アメリカの授業内の学生の姿勢は能動的であるため、質問するだけでなく、それぞれの意見を自由に述べる学生が多く、しばしば議論が盛り上がることもある。一方的に講義を行うスタイルはあまりなく、学生の主体性が求められるためアウトプットできる場であり、実践的であった。自分の意見を持つことはアメリカでは尊重されているため、意見に対してクラスメイトの主張に耳を傾けるといふ、相互の理解を深めることを重視しているように見えた。

3つ目は、予習、復習の重要性である。ディスカッションに参加することは、成績に影響を及ぼすため、トピックについて理解している必要があるため予習、復習が欠かせない。「自分の意見を述べる」ことに対して不慣れだったため、あらかじめ話すことについて決めておくことで授業にスムーズに入ることができた。事前に用意しておくことである程度ディスカッションに参加することができたため、準備の重要性を学んだ。

4つ目は、課題である。1つの学期で4つの授業を履修していたため一見少ないように見え

るが、予習や復習に加えて課題の量が非常に多い。特に、リーディングは骨が折れ、図書館で夜中まで勉強していた。最初の学期は慣れることで精いっぱいだったため、10 から 15 ページほどのリーディングに圧倒され、必死の思いで読み込んでいた。夜遅くまで課題に時間を費やしており、スケジュールに余裕がない状態だったが、留学を通してすべて読む必要はないことが分かった。ただ読んでいる状態はその内容の理解度としては低く、生産性のないものになっていしまう。そのリーディングの章ごとの要約が理解することによって、ストレスが減り、効率化することができた。時間をかけて終わらそうとするのではなく、授業の大概をつかむために理解、効率を重視した結果、課題に対して余計な時間を費やすことはなくなった。このように問題に対して解決までの道筋を立てる能力が身についた。

授業を通して異文化を体験したことは、LGBTQ に対する考え方である。さまざまな学校のアクティビティや授業に参加する際、初対面の人と自己紹介する機会が多かったが、「My pronouns are she/her」という表現をよく耳にした。この表現は、自分に対して使ってほしい代名詞の役割があるが、見た目や性別にかかわらず、自分自身で代名詞を選ぶことができる。例を挙げると、性別が男で男性として扱ってほしい場合、「My pronouns are he/him」ということができる。日本では受け入れられることが少ない LGBTQ だが、このように自己紹介の場で自分を表現することは、多様性に溢れ、互いに尊重するような考え方があるアメリカならではの考え方である。加えて、授業で人種などのセンシティブな題材を扱う際にも、教授が断りを入れている場面もあり、アメリカらしさがあり印象的であった。

留学生活で成長できた部分は多くある。1つは基礎英語力の向上が挙げられる。留学前は、TOEFL を受験していたものの文法的に間違っていないかという不安で会話がスムーズに行われなかった。しかし、英語を話す友達に囲まれ、自分に必要な知識を身につけることで英語力は確実に伸びたと実感した。証拠として、留学後のニューヨークでのインターンシップが挙げられる。日系企業だったため社内での会話は日本語だったが、物をピックアップする際、英語でスムーズに会話をしている自分に気が付いた。また、このような環境のもと、Podcast や YouTube など英語のラジオを聴いたり量をこなしていったことも語学力の向上につながったと言える。あわせて、人前でのプレゼンテーションは懸念材料であったが自分自身を成長させてくれたように感じる。実際、周りに比べて流暢ではないため練習に多くの時間を費やした。リンクに配慮し、本番を想定しながらプレゼンテーションの予行を行ったことは記憶に新しい。この経験があったからこそ、インターンシップではマーケティング活動の提案骨子の発表の際、一定の評価を得ることができたと考えている。

留学を通して、異文化交流を経て、多くの価値観を得ることができた。また言語によるコミュニケーションは失敗することに対して不安が多かったが、建設的な結果を生むためには英語学習において量と質をどのように最大化するかを考え、積極的な意欲を持つことが重要だということが分かった。価値観を広げるだけでなく、課題解決能力を身につけることができたため、留学は非常に貴重な体験になった。